

古典期ギリシアにおける正統的知識観の成立

—正統的知識と非正統的知識 III—

大 出 晁

本論文では本誌に掲載した「古代メソポタミアにおける知の系譜」と「古代エジプトおよびギリシアにおける知の系譜」の2編の論文につづいて紀元前4世紀を中心とする古典期ギリシアにおける〈正統的知識観〉の成立の過程とその特徴について考察する。本論にはいる前に上記2論文で論じた紀元前5世紀末ごろまでの古代オリエントとギリシアにおける知識の特徴点について要約しておきたい。

I 紀元前5世紀末以前の知識の特徴

1 古代オリエントにおける知識

古代オリエントにおける知識の特徴としてあげられるのは、冶金、窯業などの知識を基本とする農機具、狩猟用具、車両、船舶、武器などの製造、土木、建築や灌漑、治水事業の遂行、各種衣料や繊維の製作、粘土板・パピルスによる各種文書の作成・保存など、政治・社会体制の維持や生活の必要に関係のふかい〈技術的知識〉であった点である。比較的理論的色彩の強い天文学の領域でもその主たる目的は暦法の制定、あるいは、農作業実施上の要求をみたすことを基本としており、天体の運行それ自体についての知識は派生的なものと言ってよい。

古代オリエントにおいては、これらの知識が神権政治的な政治体制のもとでの権力者による国政の運営や被支配者階級としての民衆の生活上の必要性と深く結びついていた事実も否定できない。さらに、権力機構の基盤は伝統的な宗

教思想とほとんど一体化しており、天文・医術の領域における知識も宗教と切り離すことはできない。それを端的に物語るひとつの事実は文字の使用である。メソポタミアにおける楔形文字もエジプトの象形文字も、その使用は、もっぱら、神官階級にゆだねられ、記録される文書も多くは治世に関連するものか、もしくは宗教的な文書であった。世界創造神話も世界の由来を物語る一種の〈説明様式〉として、人々を納得させ、規制するひとつの知識形態であった。このような特質を一般的に〈宗教と知識の融合〉とよびうるであろうが、もうひとつの特質として〈予言重視の知識観〉をあげておく必要がある。

古代オリエントにおける知識は各種の技術の伝承・習得をとおして過去の知識・技術を将来に生かすことを指向していた。現在でも技術の発展はかならずしも原因の探究とは結びつかず、アド・ホックな改良に依存することが多いが、古代、とくにオリエントにおいては原因の観念も定かではなかった。それが端的にあらわれているのは医術の領域であるが、病因の探究がはっきりと試みられているケースは皆無と言ってよい。恒常的な関連を基礎とする原因の観念は存在せず、悪霊の取りつきといった非恒常的な結びつきで満足されていた。それゆえ、知識は、その根拠・理由の追究はともかくとして、将来の出来事をなんらかの手段で予知し、予言して以後の生活に役だてることを意図していたと思われる。おそらく、そのもっとも典型的な例は医術における予後の重視であり、また、メソポタミアにおける「推算暦」の作成であろう。

その「位どり」記法の採用において他の地域に見られぬ独自性を発揮して、それゆえそれにもとづく算法において卓越していたメソポタミアにおいても、数学的な定理の証明が試みられたことはなかった。「ピュタゴラスの定理」に相当するものは知られており、実際に使用されていたらしいとされているが、その証明への努力は見られない。このような形での実用性は古代オリエントの知識形態の基本的な特質と言いうるのである。この予言重視の実用的な知識観も基本的に宗教と一体化していた知識という特質に依存していたと考えられる。宇宙万物をなんらかの仕方で支配・管理している神々の意向を知りたいという願望は民衆を支配する王にも、支配される民衆にも共通に存在していた。そし

て、この両者のあいだに介在する神官階級が特異な地位と権力を保持していたのである。

2 古代ギリシアにおける知識

古代オリエントの宗教と融合した予言重視の知識観は紀元前11世紀以前のギリシアにおいても本質的には変わらなかった。古代ギリシアのクレタ・ミュケナイ文化においても政治体制と文化的状況に基本的な変化は認められない。事態が変わりはじめるのは、ドーリア人の侵攻によるミュケナイ社会の崩壊とそれにつづくポリスの形成である。ポリス国家の発生と民主制の発達とは幾多の曲折を経ながらもギリシア社会および文化の構造に基本的な変革をもたらした。宗教はギリシア独自の〈神と人間の共存〉を可能にするものに変貌し、イオニアを中心とする貨幣経済は商業の興隆を産み、フェニキア文字に由来する音標文字の発達は特定階級に限られぬ知識の解放を結果した。これらの基礎的な変革は前6世紀における自然哲学者の出現という思想史上の革命的変革を生ぜしめた。前6世紀以降ギリシア人たちは、それ以前のホメーロス・ヘシオドス的な神にたよる説明様式から脱して、神の業によらぬ必然性にもとづく生成・消滅を主張して、神から独立な自然現象の理解に努力し、また、他方では、人間の議論に内在する構造に注目してその把握を意図するようになった。これらの変化の背後には政治的権力の主体となった民衆によって人間化されたオリュンポスの神々の超越的権威の喪失と、オルペウス派など反体制的宗教の靈魂観の影響や議会的言論の発達に根ざした言語表現へのきわめて深い関心とがある。言語現象の重視は、また、それを操る人間精神への畏敬も内蔵していた。かくして、前5世紀末のギリシアにおいては、必然性という内在的機構にもとづいて変化する自然と、それとは独立で場合によってはそれと対峙する精神（ヌウス、ロゴス）との二極分解をはらむ世界概念が誕生するようになった。

これらの変化の背後には前6世紀はじめ以来一貫して〈説明〉への欲求が見られる。ギリシア人はオリエントの人々とは異なり、事象の依って来る由縁に関心を抱いた。彼らはホメーロス流の「神の業」による説明に満足せず、事象間の恒常的関連への関心を表明し、それによる説明を求めた。ヒッポクラテス

学派の主張する原因 (aitia) のように「責任の所在」を因果に類する恒常的な結びつきに探ろうとした。ギリシアの知識探究にはつねに因果的説明への欲求が潜んでいる。自然現象におけるこのような欲求とおなじように、数学においても事象の根拠への探究が出現した。前5世紀以降もっぱらピュタゴラス学派においてははっきりと現れた証明への努力はその端的な表現である。自然現象に限られぬこのような〈根拠の探索〉はエレア派やソピストの試みと相まって、議論の展開に内在する構造への関心をよびおこし、その追究を意図する機運を生ぜしめた。こうして、ギリシアにおけるもっとも特徴的な「論理」への関心が前5世紀末にはきわめて明瞭な形をとることになった。

このような知識観の特質としてその〈過去指向〉をあげることができよう。事象の発生の由来は過去に求めなければならず、数学的証明の前提も結論以前に探られねばならない。ギリシア人の説明への欲求はその本質上過去を指向せざるをえなかったのである。この点は予言重視のオリエントの知識の〈未来指向〉と際だった対照を見せている。しかも、後に論ずるようにギリシア的心性の特徴としてその「過去重視」が指摘されているのである。

オリエントとの対比で言えば、ギリシア的知識の〈脱宗教性〉もあげておく必要がある。ギリシア宗教が、神々の人間くささにおいても神官不要のその制度的な面においても、それ以外の地域、民族における宗教ときわめて異質であったことも知識の脱宗教化に関連しているが、自然哲学者たちの提示している世界組成に関する神の意志に依らぬ説明方式や、一般的に宗教的要素の色濃い医術の領域におけるヒポクラテス派の鋭い宗教批判はとくに注目に値しよう。オリエントの知識の〈実用性重視の未来指向と宗教との一体化〉に対するギリシア的知識の〈説明重視の過去指向と脱宗教化〉はきわめて鮮やかなコントラストを示しているが、この差異とともにそれがまたオリエントとギリシアにおける政治・社会体制の相違に強く結びついていることの確認がすでに刊行された2論文の主要な論点であった。ところで、前4世紀のギリシアにおいてはギリシア的知識のこのような基本的特質がいつそう顕在化し、きわめて体系的な主張として出現してくる。本論文はその経過と特質の解明を意図している。

II ソクラテス・プラトンにおける知識論

言うまでもなくプラトンの著作と切り離してソクラテスの思想を論ずることは不可能であるし、プラトンの中期の著作にいたるまでは両者の主張を区別して述べることは意味をもたない。それゆえ、ここではとくに両者の意見を区別するつもりはない。一般にプラトンの知識論を論ずる場合にまずとりあげられるのは中期の著作とされる「メノン」と『国家』である。ここでもこれらの対話篇に見られる主張の吟味からはじめるが、最終的には『テアイテトス』篇の検討が重要な意味をもつことになろう。ソクラテスを中心とする初期対話篇は勇気、思慮といった「〈徳〉とはなにか」という倫理的な主題をあつかい、その追究過程で「ある名称でよばれる当のそのもの」、つまり、勇気の〈イデア〉、勇気の本質という概念が登場する。このような問題意識はソクラテスの自己の無知の認識を契機とする「知とはなにか」という問いかけに発するが、そこでは、まず、知とは本質把握、「イデアを視てとること」として主張された。中期の著作の知識論はこのイデアとその把握を背景として展開される。

前386年ごろの作と推定される「メノン」における議論は、ソクラテスがアテナイ訪問中のテッタリアの貴族の青年メノン宅を訪れるという設定ではじまり、ソクラテス的な「徳とはなにか」という主題をめぐる問答の末に、メノンによってつぎの「知のデイレンマ」が提起される。

いったい、それが何であるかを全然知らないものを、どうして探究することができるのでしょうか。また、仮にそれを見つけたとしても、どうして、それが探究していたものと分かるのでしょうか、探究していたものが何であるかを全然知らなかったとすれば。(80D5-8)¹⁾

この問いに対してとりあえず提出されるのは、ソクラテスのつぎの言葉である：賢い人々から聞いたところでは、人間の魂は不死であり、ひとたび生を終えてもまた生まれてくる；それゆえ、徳のことであれ、その他のことであれ、以前に知っていて記憶にとどめられていたことを思いだすことができる；思いだすこと、これが学習とよばれている(81A10-E2)。このオルペウスのな

魂不死説にもとづく「想起説」はつぎのような具体的事例によってさらに詳論される。

かつて幾何学を学習したことのないメノンの召使いの少年にソクラテスはあたえられた正方形の2倍の面積をもつ正方形の作図をもとめる。当時は知られていなかったはずの「ピュタゴラスの定理」を学んだことのない少年にはこれは難問であるが、ソクラテスは順次問いを重ねることで、もとの正方形の対角線を1辺とする正方形がもとめる正方形であることを示し、少年もまた、最終的に理解し同意する。かくして、ソクラテスは、少年がこの正しい解答を獲得したのは誰かから教えられたのではなく、みずから獲得したのであって、それゆえ、もともと自分のうちにもっていたものを思いだしたのだ、つまり、もともと魂が所有していた知を想起したのだ、と言う。

この想起説はわれわれの目にはいささか奇異に映るが、民俗学者 J. P. Vernant はその背後の宗教思想的な伝統を指摘する。彼の論旨はおおむねつぎのようである。パルテノンの神々のうちには「信念」(pistis) などとともに「記憶」(mnēmosynē) なる女神がいて、彼女は詩神ムーサの母親とされていた。これは古代における叙事詩の作詩に先だって英雄たちの事跡の記憶が必要と考えられたからである。また、『イリアド』の一節の400ほどの詩句がもっぱら固有名詞からなることにうかがえるように、前8-7世紀における古代ギリシアの口伝の文化においては、詩の朗唱も記憶術の高度の訓練を要求した。それがこの女神への信仰の由来であるが、過去へさかのぼること、過去をよびおこすこと、それは物事の起源を示すことで、不可視な別世界との交流なのであった。かくして、〈想起〉は秘儀伝授の性格をおびることになった。

ところで、このような状況は前7世紀ごろギリシアに叙情詩が誕生するにおよんである種の変革を受けるようになった。季節や世代の交代に根ざした循環的な古代の時間観念は叙情詩の描く人間のさまざまな情念の出現とともにしだいに変貌する。それまで生と死との交替といった宇宙的時間に吸収されていた個人の生活は、その現在の喜怒哀楽といった情念とともに、変わりやすく逆転不可能な時間の流れのうちに呑みこまれ、死へとむかう時間の線状の流れは生

の価値を消滅させる破壊力と化した。

この結果、宗教・哲学的思想は二つの方向に屈折する：人間存在に関わる線状の時間に対してそれから逃れようとする否定的な態度と、たとえ循環的な時間にせよ、神的なものを時間にしばりつけるすべてから純化しようとする努力である。また、想起もこの悲惨な人間世界の時間からぬけだして、神の永遠性を象徴する本来の円環へとそれを再統合する努力を意味するものとなった。人間的な時間からの逃亡と神的な時間との合一、この二つが神話的な記憶の特徴であり、想起のプラトンの理論にわれわれが再発見するものである。プラトンにあっては想起は過ぎ去った生活には関係しない。それはその総体が実在を構成する真理を対象とし、女神ムネーモシュネは人間に内在する認識能力そのものとなった。かつて神話的な逃避の手段であった想起の努力はいまや真理の探究と融合した (Vernant, *Mythe* 109-36)。

メノンのもうひとつ注目すべき点はソクラテスの説く「正しい意見」(orthodoxa) と「知識」(epistēmē) の区別である。これはプラトンの著作においてくり返される主題であるが、この対話篇ではつぎのように述べられている。「正しい意見は知識とくらべて何ひとつ劣るところはなく、また有益であるという点でもけっしてひけをとらない」(98 B) が、「正しい意見というものも、やはり、われわれの中にとどまっているあいだは価値があり、あらゆるよいことを成就させてくれる。だがそれは長い間じっとしていようとはせず、人間の魂の中から逃げ出してしまうものであるから、それほどたいした価値があるとは言えない——ひとがそうした意見を原因(根拠)の思考によって縛りつけてしまわないうちはね。しかるにこのことこそ、親愛なるメノン、先にわれわれが同意したように、想起にほかならないのだ。そして、こうして縛りつけられると、それまで意見だったものは、まず第一に知識となり、さらに永続的なものとなる。ここにこそ、知識が正しい意見よりも高く評価される所以があり、知識は縛りつけられているという点において、正しい意見とは異なるわけなのだ」(97 C)。ここでは、正しい意見を根拠の思考によって縛りつけた知識こそ想起なのである。

『メノン』における想起説はその数年後の『パイドン』においてもくり返されたうえで、「不死の靈魂」と結びつく。ソクラテスはつぎの二つの可能性を検討する。(a)われわれはみな、それら【イデア】を知っている状態で生まれ、そして生涯を通じて、まさにその知識を現にもちつづけるのか；(b)われわれの言い方では、学び知る人々は後になってそれを想起しているのにほかならないのか、のいずれかである (6 A)。そして、もし(a)の場合であれば、当の事柄についてわれわれはいつでも説明でき、定義できることになるが、現実にはそうでない人々がいるので、(b)の可能性が残る。そこで、ソクラテスは言う。「してみると、魂は存在していたのだ、シミアス。この人間というもののうちに存在する以前にも肉体から離れて、しかも知をともないつつ、存在していたのだ」(6 C)。さらに、魂がそれ自身にかえるのが許されるときにはかのもの(イデア)とともにありつづけ、永劫不変の存在に触れるために魂の彷徨は止み、魂もつねに同一な不変なものとなり、知と呼ばれるものは、本来、魂のそのような状態を名づけたものだ、と説かれている。さらに、『パイドン』と同時期の作品といわれる『パイドロス』においてはより詩的に知識と真実在との関係が歌い上げられている。「天の彼方の領域に位置を占めるもの」、「真の意味においてあるところの存在」、「色なく、形なく、触れることもできず、ただ、魂の導き手である知性のみが観ることのできるかの〈実有〉」についての知識が真実の知識であって、それは生成流転するような性格をもたない知識なのである (47 D-8 B)。

一方、『メノン』篇の「意見」と「知識」との区別は、約10年後の作品『国家』篇においてより詳細に論じられる。その有名な「線分の比喩」の議論はつぎのように展開されている。まず線分ABを取り、それを一定の比例でAC、CBに分割し、さらに、そのそれぞれの部分をAD、DCおよびCE、EBの部分に分ける。

A ——— D ——— C ——— E ——— B

このAC, CBの部分は可視界(感覚界)と可知界に対応し、この比例は像とその原物との関係を表わしている。そして、感覚界ACにおいてADとDCの線分は、それぞれ、影や水面の像とそれらの実物である動植物などを意味し、可知界CBにおいてはCE, EBは仮設的な措定物と非仮設的なものに対応している、といわれる。すなわち、CE部分は感覚界では実物であったものを像として用いながら、仮設から出発して始原へさかのぼることなく結末へとむかう(推論するの意であろうか?)魂の探究過程を表わすのに対して、EB部分は仮設から出発して仮設ではない始原へとむかい、像を用いずに「実相」そのもの(イデア)を用いる探究過程を示している(509 D-10 B)。

これに関するつぎの議論は興味ふかい。このEB部分は「ロゴスそれ自身が問答の力によって把握するもの」であり、「この場合ロゴスはさまざまな仮設(hypothesis)を絶対的な始原とすることなく、文字どおり(下に(hypo)おかれたもの(thesis))となし、いわば踏み台として、また躍動のための拠り所として取りあつかいつつ、それによってついに、もはや仮設でないものにまでいたり、万有の始原に到達する」。そして、最終的に、始原から最後の結末にいたるまで下降をつづけるが、「その際、およそ感覚されるものを補助的に用いることはいっさいなく、ただ〈実相〉そのものだけを用いて、〈実相〉を通過して〈実相〉へと動き、そして最後に〈実相〉において終わる」。この非仮設的思考は仮設的思考から「悟性的思考」(間接知, dianoia)に対する「知性的思考」(直接知, noēsis)として区別され、間接知は意見と知識の中間として位置づけられている。さらに、感覚界のAD, DC部分は、それぞれ、「影像知覚」(間接知覚, eikasia), 「確信」(直接知覚, pistis)とよばれ(511 A), さらに、前の二つをあわせて「知性の働き」、後の二つをあわせて「意見の状態」とされている(533 C)。

この比喩は、第7巻冒頭に提出される、人間を洞窟の奥をむいて縛られた囚人になぞらえたより具象的な「洞窟の比喩」とともに、中期におけるプラトン知識論の基本的な見取り図を提供してくれるが、ここでは、さらに、後期の著作に数えられる『テアイテトス』をとりあげることにしよう。そこには、私の

眼から見てきわめて注目すべき記述が現われているからである。

『テアイテトス』は前368年-67年ごろ、プラトン60歳ごろの著作とされる。この中でソクラテスは若い数学者テアイテトスその他とあらためて「知識とは何か」を問うているが、彼は「まさに知識であるところのもの、それはそもそも何であろうかということが僕には自分だけでは十分に把握することができないでいるのだ」という悲観的な発言で対話をはじめている (145 E)。そして、プロタゴラス流の「知識=感覚説」あるいは「知識説=意見」などを吟味したのち、テアイテトスは他人からの伝聞として「知識とは真なる意見にロゴスをくわえたもの」という提案を試みる (201 D)。

ところで、このロゴスなるものに検討をくわえると、それは結局「問題になっているものがそれをもってすべてのものから分かれて別になる標識」といったものとなる (208 C)。そこで、もし人がなにかについて「その正しい意見をもっていて、さらにそれを他のものから分かるところの差別をも把握したとすれば、その人はそのときまではそれについて意見をもっていたのにすぎなかったのに、いまは、まさにそのものの知識をもつものになる」ということになる (208 D)。しかし、あるものについて正しい意見をもつものは、そのものの差異を示す標識を脳裏に記憶の刻印として印象づけ、固定させておくことが必要であるから、すでに正しい意見をもつものがさらにその差異の標識を追加取得するというのは無駄なことであろう。そして、もし知識が正しい意見にロゴス (あるいは差異) の知識をくわえたものだというならば、探究の対象である知識そのものがさらに知識によって規定されることとなって、「おめでたく愚かしいこと」になる (210 A)。こうして、この対話篇はこれまでの試みの不十分さを省みながら、産婆術は「これはせつかく生みだされたものだけでも、虚妄のものだから養育には値しないと申し渡している」ことになるとソクラテスは言う。つづけて、彼にできることは、この吟味のおかげでテアイテトスがよりよいものを獲得できるか、それとも自分の無知を自覚して他人とうまく折りあえるようになるかのどちらかであろう、と言ったあげくに、裁判の件でアルコーンのところに出頭しなければならない、と言い残しておわる

(210 B-C)。私にはこれはソクラテスの遺言とも；また、プラトンの嘆きに似た悲痛な告白とも響く。端的に言って、プラトンによる〈知識〉と〈意見〉の区別の解明は、その20年におよぶ努力にもかかわらず、最終的に不成功におわったと言わざるをえないのである。『パルメニデス』と『ティマイオス』に若干の言及はあるにしても、プラトンはもはやこの問題について多くを論ずることなかった。

Ⅲ アリストテレスの知識観

ギリシア北部マケドニアのスタゲイラの伝統ある医家に生まれたイオニア人アリストテレスがアテナイに赴いてプラトンの学塾アカデメイアにはいったのは、異伝・異説はあるが、彼の17歳のとき、前367年のこととされている。プラトン約60歳、『テアイテトス』執筆のころである。その後プラトンの没年前347年までアカデメイアにとどまり、以後小アジアのアッソスを経てレスボス島のミュティレネで生物学的研究に従事した。さらに、マケドニア王フィリッポスの招きで王子アレクサンドロスを教え、その王位継承後の前335年ごろアテナイにもどり、アポロン・リュケイオスの地にその学園リュケイオンを創設した。アレキサンドロス大王が遠征中に死去した年の翌年の前322年、彼は反マケドニア感情をのがれてアテナイから移り住んでいたユウボイア島のカルキスで病没した。

アリストテレスの著作の年代や順序はあきらかでなく、専門家による議論の対象であるが、それらの主要なものは、アカデメイアにおける時期の後半、アリストテレス35歳以降のことと推察され、われわれがここでもっぱら考察するのは『分析論後書』および諸著作中のそれに関連する箇所である。

アリストテレスの『分析論』における推論の分析は人類の知識論史上もっとも重要な業績のひとつと見なされるべきものであるが、その成立過程はまったく不明である。プラトン後期の著作『パルメニデス』、『ソピスト』に見られる分割法 (diairesis) に関する議論、ピュタゴラス派における証明の登場、ソピストたちの説得術への関心、さらに、民主制下における弁論術の必要性などが

論理研究への機運を醸成し、刺激したことはうたがえないが、アリストテレスのこの分野における研究を直接に促したものがなんであったのかはあきらかではない。しかし、私はあえてアリストテレスの探究心を駆りたてたものは、プラトンが解明できなかつた「〈意見〉と〈知識〉をわける標識としてのロゴス」の問題であつたのではないかと推測している。良家の子女として少年時代修辞学の教養をつみ、アテナイでもはじめは修辞学者イソクラテスに学んだが、プラトンの思想に感銘してその門をたたいたという説もあるアリストテレスのことであるから、アカデメイアにはいったころに執筆された『テアイテトス』に刺激をうけ、知識論に関心を抱いたことは十分ありうることと思える。この場合の「ロゴス」を単に「区別の標識」と解することはプラトンの放棄した試みをくり返すことにはほかならず、それにつきぬなにかを探究することこそこの著作の教訓であつたはずなのである。そして、彼の『分析論前・後書』における探究がその成果であつた。

『分析論』前・後書の成立順序についても異論があり、この名称の通りとする人もその逆の順序を主張する人もあるが、私は、その細部においてはともかく、全体としてはこの名称の順序で成立したものと考える。後書の内容には前書の成果を俟たずには議論不可能と見られる点が多々あるからである。そこで、まず、『分析論前書』の主要な結果のみを考察することにしよう。

A 『分析論前書』における推論の研究

言うまでもなく本書は論理学の書物であり、そこではアリストテレスの言う推論 (syllogismos)、すなわち、日本語で言う「三段論法」の理論が展開されている。まず、アリストテレスは人間の推論をつぎのような標準的な形態において考察した。

- 1 推論は2個の前提 (protasis) と1個の結論 (symperasma) の3個の言明 (logos) から成る。
- 2 これらの言明はつぎの形のいずれかにはいる。
 - (1) 全称肯定：すべてのAはBである (A)
 - (2) 全称否定：すべてのAはBでない (E)

(3) 特称肯定：ある A は B である (I)

(4) 特称否定：ある A は B でない (O)

括弧内の文字は中世の論理学者の考案したそれぞれの言明形の略記号である。

3 推論には妥当な推論と妥当でない推論がある (アリストテレスは *sylogismos* なる語をもっぱら妥当な推論に対して用いている)。妥当な推論 *sylogismos* とは

いくつかのもの [前提] が措定される時、その措定されたものとは異なるなにか別のものがそれらが措定されているということからして必然的に (*anagkē*) 帰結する (*symbainein*) 言説 (*logos*) である。 (*An. Pr.* 24b19-21)

4 妥当な推論の代表的なものは

すべての A は B である。

すべての B は Γ である。

それゆえ、すべての A は Γ である。

このほかにアリストテレスは18個、したがって計19個の妥当な推論をあげている。これらの中世の論理学者たちは上の2の言明形の略記号を用い、また、推論の結論の主語 A を小名辞、述語 Γ を大名辞とよぶとともに、大・小名辞の現われる前提を、それぞれ、大・小前提、両前提に現われる B を媒名辞と名づけ、大前提を小前提に先行させるという記法を案出した。アリストテレス自身は、名辞は項 (*horos*)、大・小・媒名辞は、それぞれ、大項 (*meizon akron*) ・小項 (*elaton akron*) ・中項 (*meson*) とよんでいた。中世論理学者の手法による妥当な推論の一覧表はつぎのようである：

I	II	III	IV
barbara	cesare	darapti	bramantip
celarent	camestres	disamis	camenes
darii	festino	datisi	dimaris
ferio	baroco	felapton	fesapo
		bocardo	fresison

ferison

ここで、I, II, III, IVは「格」(figure)とよばれ、各言明中の大・小名辞 Γ , Aおよび媒名辞Bの現われ方:

I	II	III	IV
B Γ	Γ B	B Γ	Γ B
A B	A B	B A	B A
A Γ	A Γ	A Γ	A Γ

を示す分類である。それぞれの格における個々の推論は「式」とよばれて、この一覧表は格式表といわれる。アリストテレス自身は

$$\Gamma - B - A \quad B - \Gamma - A \quad \Gamma - A - B$$

という分類を採用したので、3個の格しかなかった。これはたんに分類法上の問題であったが、後世アリストテレスはIV格の推論を知らなかったという誤った伝説が生じ、IV格はローマの医者ガレノスの名を冠して「ガレノス格」とよばれた。

B 以上が『分析論前書』における結果のきわめて概略的な記述であるが、以下、評価を交えながら多少の補足をくわえることにしたい。

(a) アリストテレスは以上述べたような推論にくわえて、言明形式に様相による区別: 「すべてのAは必然的にBである」あるいは「あるAは可能的にBである」と「すべて」と「ある」という限定詞をもたない不定 (adioriston) な言明の区別を導入することによって生ずる推論、様相推論と不定推論についても考察している。この領域でのアリストテレスの成果ははるかに不安定で問題が多いうえに、本論文の趣旨に関係しないので、ここでは論じない。さらに、アリストテレスは主語と述語の変換と全称言明と特称言明との変換を、それぞれ、换位、換質とよび、この操作を適宜ほどこすことによってI格以外の推論はすべてI格に帰着させることができることを示した。前述の一覧表の各式の冒頭の子音 b, c, d, f はこの操作でその式が帰着される場所のI格の式を表わしている。アリストテレスはとくに全称肯定言明の結論を重視したから、I格の最初の式 *barbara* をもっとも重要な推論形式と見なした。

(b) アリストテレスの論理学上の業績のうちでもっとも評価すべきは、その対象領域が制限されすぎていたにしろ、推論を三段論法という範囲に限定し、しかも、それを構成する言明も4個の言明形に限定した点にある。それによって、彼はその範囲では19世紀半ばまで範型とされる結果を獲得することができた。それとならんで重要なのは、彼が推論の分析において採用した手法で、彼は推論の妥当性はその構造的特性に依存していることを明瞭に把握し、それを明確に表現するのに名辞に対する記号としてギリシア語アルファベットの大字A, B, Γ, Δ, Eなどを用いたのである。彼によるこの記号の導入こそ、論理学の特性に根ざしたものであり、19世紀中葉以来の記号論理学の先駆であることは疑いがない。

(c) 彼の論理学における欠陥ともいえる大きな問題は、関係概念の取り扱いが不十分であったことである。彼の体系において関係概念が処理できないことはないにしても、それはきわめて円滑さを欠き、関係概念の特質をむしろ無視するものであったと言ってよい。

(d) アリストテレスの業績において私が看過できない重要な点と評価するのは「推論は前提の真理性（あるいは信頼度）を低下させない」という推論の特徴（私はこれを〈演繹原理〉とよんだ）をはっきりと捉えていたことである。彼は「偽なる結論が真なる前提から推論されることは不可能であるが、真なる結論が偽なる前提から推論されることは可能である」(An. Pr. 53b7-10)と明言しているだけでなく、「もし結論が偽ならば、議論の根拠のすべてもしくはどれかは偽でなければならぬが、結論が真であれば、根拠のすべてもしくはどれかが真であるとはかぎらない」(An. Pr. 57a37-39)とも述べている。さらに、「もしも真が偽から証明されることが不可能であったならば、分析することはより容易であったであろう」と嘆いているのである (An. Post. 78a7-8)。

さて、以上のような『分析論前書』の要約につづいて『分析論後書』の検討に移ろう。『分析論後書』は、『分析論前書』がいわば純粹に論理学書であるのに対して、学問方法論あるいは知識論に関する書物である。それゆえ、本論文の趣旨には関係するところきわめて大きい。なかでも、本書で論じられている

〈論証的知識〉は以後の知識論におけるひとつのパラダイムを提示したものであって、私が〈正統的知識観〉とよんできたものの骨格をあたえるものにほかならない。したがって、もっぱらこの概念を中心にして議論をすすめてゆくこととしよう。

アリストテレスは『分析論後書』第2巻の冒頭で「知識」の定義をあたえる：

詭弁論者の偶然的な仕方ではなく、何にもせよなにかを端的に認識する (epistasthai haplōs) とわれわれが思うのは、それによって事態が成立する原因 (aitia) がその事態の原因であり、その事態は別様ではありえないことを知る (gignōskein) とわれわれが思うときである (71b11-13)。

これにつづけて

論証 (apodeixis) とは認識的推論 (syllogismos epistēmōnikos) のことを言う；認識的推論とはそれをもつかぎりにおいてわれわれが知識を獲得する推論のことを言う (71b16-19)。

これらの引用においてあきらかなように、アリストテレスはソクラテス・プラトンの課題：「知識」と「意見」の差異、の問題に対して、知識には論証による知識を、意見には論証によらぬ知識という概念を適用することで答えようとしている。この点は『後書』第1巻33章においてより詳細に論じられている。そこでは、意見がことの真・偽をあつかう点では知識とおなじであるが、知識が別様ではありえぬという意味で必然的であるのに、意見はそうではなく、それゆえ、不確か (abebaios) であると論じられている。そこで、不確かな意見に対して知識は確実であることを特徴とし、この点ではソクラテス・プラトンの立場と異なるところはない。彼の主張はその確実性を推論によって規定しようとするもので、そこに彼の独自性が見られるのである。もしも彼が『前書』において展開したような推論の分析を有していなかったならば、この規定は空虚でしかなく、プラトンの轍を踏むことになったであろう。

ところで、確実な知識が推論によってえられるのであれば、推論の結論は知識に属する以上、当然確実でなければならない。私が上で演繹原理として指摘した推論の特性からすると、妥当な推論は前提の確実性を低下させることはな

いが、確実な結論が不確実な前提から結果することはありうる。しかし、もし前提が確実ならば、妥当な推論があたえるのは確実な結論のみであるから、アリストテレスは論証は確実な前提から出発する必要があると考えた。この前提の確実性を表現するのに彼はつぎのような条件を述べている。

論証的知識 (apodeiktikē epistēmē) は真 (alēthē) で、第一 (prōton) であり、無中項 (ameson) で、結論よりもよく知られ (gnōrimoteron), それより先 (prōteron), かつ、その原因 (aitia) であるもの [諸前提] からでなければならない; というのは、このようにして、示されるもの [結論] の本来の諸原理 (archai oikiai) が生ずることになるであろうからである。これらなしにも推論は生ずるであろうが、それは知識を産むことはないであろうから論証が生ずることはないであろうゆえにである (71b21-25)。

ここで述べられている諸条件のうちで「真である」というのは一応不問にするとして、「第一である」、「無中項である」というのは、その前提そのものが他の推論の結論であれば、アリストテレスが一貫して容認しない無限後退におちいることを避けるための条件である。「無中項」の表現は三段論法という推論形式はつねに中項を媒介として成立するところから、推論の存在を否定するための慣用句である。残りの3条件は以下の論旨に重要な関係をもつので、それぞれの関連箇所でも議論することにした。

アリストテレスの「論証」のイメージはつぎのようなものであろう。上述の条件をみだす確実な前提から出発する論証によって、われわれは確実な結論を獲得し、この論証過程に現われる前提や中間的結論が知識を形成する。もちろん、論証がいつでも最初の究極的前提から出発するとはかぎらないから、アリストテレスといえども中間的な前提から出発する論証も認めていたであろうが、最終的にはその第一の前提からの論証をその理想型と見なしていたにちがいない。しかし、彼が自然学者として自然探究に従事していたときにこのような理想型の論証を用いていたのか、また、それのみを用いていたかどうかについては議論が戦わされている。だが、このような論証が理想型としてアリストテレスの念頭にあったことはうたがえないであろうし、その理論を「論証の公的理論」とよぶ (Lloyd, 12) のはそれなりの理由がある。

(78)

さて、アリストテレスはこの論証について例示とともに2種の区別を導入した。これが有名なつぎの「根拠による論証」(apodeixis dioti) と「事実による論証」(apodeixis hoti) の区別である。〔後書〕から、まず、根拠による論証の例をあげよう。

近くにあるものは瞬かない。 地球による光の遮蔽をうけるものは蝕をうける。
惑星は近くにある。 月は地球による光の遮蔽をうける。
ゆえに、惑星は瞬かない。 ゆえに、月は蝕をうける。

(78^a30-35)

(90^a17-19)

樹幹と葉柄の接合部において樹液の凝結する植物は落葉樹である。
葡萄は樹幹と葉柄の結合部において樹液の凝結する植物である。
ゆえに、葡萄は落葉樹である。

(99^a23-29)

つぎに、事実による論証の例に移ろう。

瞬かないものは近くにある。 蝕をうけるものは地球による光の遮蔽をうける。
惑星は瞬かない。 月は蝕をうける。
ゆえに、惑星は近くにある。 ゆえに、月は地球による光の遮蔽をうける。

(78^a34-38)

(98^b20-22)

落葉樹は樹幹と葉柄の結合部において樹液が凝結する。
葡萄は落葉樹である。
ゆえに、葡萄は樹幹と葉柄の結合部において樹液が凝結する。

(98^b11-16)

この区別に対するアリストテレスの理由を聞こう。その差異は中項にある。根拠による論証においては、「近くにあること」、「地球による光の遮蔽」、「樹幹と葉柄の結合部における樹液の凝結」が中項であって、それらは、おのおの、「瞬かないこと」、「蝕」、「落葉」の原因となっているが、事実による論証の中項、「瞬かないこと」、「蝕」、「落葉」は、それぞれ、「近くにあること」、「地球による光の遮蔽」、「樹幹と葉柄の結合部における樹液の凝結」の原因ではないからである。たとえば、「惑星は近くにあるから、瞬かないのであって、瞬か

ないから近くにあるのではない」(78a37-39) というのがアリストテレスの主張であって、これ以上の理由を彼はあげていない。しかし、われわれは「瞬かないから、近くにある」、「蝕が生ずるから、月は地球による光の遮蔽をうける」、「落葉するから、樹幹と葉柄の結合部において樹液が凝結する」と主張することも可能と思われるから、この理由づけは十分に説得的とはいいがたい。もちろん、後者の表現における「から」はアリストテレスの言う「から」となにか異なるニュアンスをもち、おそらく、〈推定の根拠〉としての意味あいをもつことは確かであろうが、むしろ、このような異なる理由づけを意味する「から」の検討・吟味こそ重要な課題と言わざるをえないのである。

この問題はさしあたり保留にして、この二つの論証のもつ特徴のいくつかについて考察することにしよう。まず、根拠による論証においては結論は直接的な感覚的事実である。「惑星は瞬かない」こと、「月蝕のおきる」こと、「葡萄の樹が落葉する」こと、これらはいずれもわれわれが感覚している事実である。それに反して、それらの原因とされている中項は、むしろ、感覚から遠い。「惑星の遠近」、「樹液の凝結」はともにただちに感覚の対象とはなりえない。天文観測にもとづく計算や、植物解剖の手段を行使する必要がある。「地球による光の遮蔽」はこれらとは異なってそれにともなう暗さは実感できるとしても、地球が遮っているというのは、アリストテレス自身語っている(90a24-31)ように、月の上にいなければ感覚不可能であろう。したがって、根拠による論証とは感覚的もしくはより感覚に近い事実を感覚により遠い、その意味では、より理論的な根拠を用いて推論するという構造をもつ。この場合、結論は感覚に近いだけにわれわれにはそれを否定するのが困難である。だれでも惑星の瞬かないこと、月蝕、葡萄の落葉を否認しようとは思わない。アリストテレスは根拠による論証における中項をまさしく原因と見なして、中項の発見こそ事実の原因の解明と明言している(90a6-10)のである。そこで、感覚的事実を推論しうる理論的中項の発見が論証の、したがって、確実な知識獲得の要件となる。そして、このような方式は動かしがたい感覚的事実に適合する中項の発見として、〈ジグソー・パズル的なはめ込み方式〉と私は名づけた。

これに反して、事実による論証は感覚的事実を表明する前提を用いて、より感覚に遠い推定的な事態を感覚的中項「瞬かない」、「蝕」、「落葉」を用いて推論するという特性をもつ。しかし、中項自体は感覚的事実だとしても、「瞬かないものは近くにある」、「蝕をうけるものは地球による光の遮蔽をうける」、「落葉するものは樹幹と葉柄の結合部において樹液が凝固する」という前提はそれなりの経験的あるいは推定上の裏づけを必要とするであろうが、この点では根拠による論証における前提と基本的な差異はないと思われる。むしろ、実際の手続きとしては、まず瞬かない星を選び出してその距離を測る、月蝕・日蝕などいくつかの蝕のケースを選んで検討する、代表的な落葉樹の葉柄部分を調べるといった操作の方が、逆の場合よりも、具体的で扱いやすいはずである。この点を科学史上著名な例を用いてもう少し検討しよう。

19世紀はじめ、ウィーンの総合病院において医師が分娩を扱う病棟と助産婦が扱う病棟では前者の産褥熱死亡者が後者よりはるかに多いことに気づいたゼンメルワイスはその原因の追究を試みた（ヘンベル4-8）。「臨終の秘蹟を授けるためにベッドのあいだを通過する神父の鳴らす鈴の音」が患者の病状を悪化させるという考えなど、いくつかの試行錯誤を経て、結局、医師は死因の解明のために解剖を行ない、その手を洗わずに患者に接するのに対して、助産婦は解剖をを行うことなく、それゆえ、最終的に、死体からの病菌の感染が原因として特定されるにいたったという話である。この二つのケースをアリストテレス流の論証に単純化すればつぎのようになる。

1

秘蹟の鈴を聞く産褥熱患者は死亡する。

医師病棟の産褥熱患者は秘蹟の鈴を聞く。

ゆえに、医師病棟の産褥熱患者は死亡する。

産褥熱死亡患者は秘蹟の鈴を聞いていた。

医師病棟の産褥熱患者は死亡する。

ゆえに、医師病棟の産褥熱患者は秘蹟の鈴を聞いていた。

2

死体を解剖する医師の産褥熱患者は死亡する。

医師病棟の産褥熱患者の医師は死体を解剖する。

ゆえに、医師病棟の産褥熱患者は死亡する。

死亡患者の医師は死体解剖を行っていた。

医師病棟の産褥熱患者は死亡する。

ゆえに、医師病棟の産褥熱患者の医師は死体解剖を行っていた。

どちらのケースも上は根拠による論証、下は事実による論証である。そして、どちらにおいても根拠による論証の結論は考察の出発点となる既知の事実「医師病棟の患者の死亡」である。そして、これはすでに容認されている事実であるから、この二つの論証の妥当性はその前提の説得力にかかるといえる。「細菌による感染」という概念が確立していなかった当時においては「秘蹟の鈴」の方がはるかに説得力をもちえたかも知れないが、アリストテレスも認めていたように、偽なる前提から真なる結論が導かれる以上、この二つの根拠による論証はどちらも推論としては真なのである。その点ではその間に優劣をつけることはできない。

ところで、事実による論証の方では事態は異なる。それらの結論、医師病棟の産褥熱患者は「秘蹟の鈴を聞く」と「その医師は死体を解剖する」は新たに提示された事態としてその有無を調べる余地がある。しかも、この場合には神父の通路を変えて鈴の音が聞こえないようにするとか、医師は死体解剖を控えるとかすることによって、異なる状況をつくりだしてその結果を見るのが可能である。それでも患者の死亡という事態は変わらないのであれば、前提の一方は事実として動かさない以上、それは第一の前提の妥当性を疑わせるに十分である。実際、この新しい事態においては「産褥熱患者は鈴を聞いていない」し、また「患者の医師は死体を解剖していない」のであるから、これと第一の前提の対偶を用いて、われわれは「医師病棟の産褥熱患者は死亡しない」とい

う事実と反する結論をうることになる。かくして、第一の前提は否定され、前提の妥当性を推論によって吟味する手段が提供されることになるろう。

さらに、もう一例、ルヴェリエとアダムスによる海王星の発見のケースを考察してみよう (Histoire 763-9)。1779年ハーシェルによって発見された惑星天王星は19世紀前半になると、その軌道の観測値からのズレがしだいに顕著になり、その原因が議論されるようになった。その際、いくつかの仮説が提出されたが、ここでは「彗星との衝突」と「新惑星の存在による引力」とを考察しよう。この場合のアリストテレス的に単純化した論法はつぎのようなるう。

3

彗星と衝突した惑星の軌道は変位する。

天王星は彗星と衝突した。

ゆえに、天王星の軌道は変位する。

軌道の変位する惑星は彗星と衝突していた。

天王星の軌道は変位している。

ゆえに、天王星は彗星と衝突していた。

4

近傍に新惑星が存在する惑星は軌道が変位する。

天王星は近傍に新惑星が存在している。

ゆえに、天王星の軌道は変位している。

軌道の変位する惑星は近傍に新惑星が存在している。

天王星の軌道は変位している。

ゆえに、天王星は近傍に新惑星が存在している。

科学史はルヴェリエとアダムスの両者の精密な計算による位置の決定から、ベルリン天文台のガッレによって1846年9月海王星が発見されたことを語っている。この場合、新惑星の発見に導くのはあきらかに事実による論証であり、

根拠による論証は、ひとたび新惑星の存在が確認されたときには、〈説明〉として機能することを示している。「事実による論証」の特質は〈予見〉にあり、それによって前提の検証（あるいは反証）の可能性を提供することにあるのである。

アリストテレスは根拠による論証を真の知識を提供するものとして随所に事実による論証に対するその優位を説いているが、しかし、すでに指摘したようにこの論証は前提の確実性を保証しない。偽なる前提から真なる結論は帰結しうるからである。しかも、偽なる前提からは偽なる結論も帰結しうるから、真なる結論のみをうるためには、前提の真であること、その確実性を保証しなければならないとアリストテレスは考えたと思われる。すでに引用した章句に現れる前提のもついくつかの条件はそれであるが、ここでは保留してあった「よりよく知られうる」と「より先である」という条件について考察しよう。

根拠による論証の結論がつねに事実としてその確実性、多くの場合、感覚的確実性を有しているのに対して、その前提、とくに、その中項は感覚より遠いという性質をもつことはすでに指摘しておいた。すでにあげた例でも、それらはむしろこれから見いださなければならない事実や性質なのである。それらが感覚的な事実や性質よりも「よりよく知られうる」ためには、もはや、感覚に頼ることはできず、また、それらが「より先である」ためには感覚に先んじなければならない。この点では、経験主義者アリストテレスはあきらかにダイレンマに陥ったにちがいない。そこで、彼はひとつの概念を案出した。すなわち、「われわれにとってよりよく知られうる・より先である」と「本性上よりよく知られうる・より先である」という区別である。惑星の瞬かないことはわれわれにとってよりよく知られうるし、先であるが、近くにあることは本性上よりよく知られうるし・先でもあるというわけである。そして、本性上よりよく知られうる、また、より先である性質をとらえるのは、明言されてはいないがおそらく〈知性〉であろうから、経験に先だって知性が独自に把握する諸性質・諸事態にもとづいて感覚的・経験的事実の確実性が保証されることになる。これは、あきらかに、経験主義からの逸脱であろうが、それをアリストテレスに

におけるプラトン主義の残滓と見るか否かは意見の分かれるところであろう。私自身はこの〈根拠による論証〉にもとづく知識観の構造がその重大な要因であろうと推測している。

ともかく、アリストテレスの重視した〈根拠による論証〉は、すでに縷々述べたように、事実を追認し、説明する構造を有し、経験的に検証不可能な前提の確実性にもとづいて事実の確実性を保証するという、非経験的で先天的ともいえる特質をもつ。それに支配される知識は、いわば「天与の確実性に塗りこめられた棺」ともいうべき知識であって、変革を拒否する知識である。それに比べれば、〈事実による論証〉は前提の検証を受容し、変革を許容するダイナミズムをもつ。それでは、なぜアリストテレスはこのような〈根拠による論証〉を評価し、その知識論の根幹としたのかを、論ずることにしたい。

まず、その直接的な理由は原因を中項と見なしたその原因観である。その理由は明らかでないことはすでに述べたが、ともかく、はっきりした理由もなくアリストテレスが「原因とは中項である」と思いこみ、それを基本としたことに彼の重要な錯誤があったように思われる。

第二点は、彼の、あるいはより一般的にギリシア的な、〈未来観〉の問題である。ギリシア人はいわば〈後ろ向きに〉未来に入った。言語学者の指摘によれば、ギリシア語の未来形は直説法的な端的な未来事象の表現ではなく、接続法的な話者の主観的な心情の投影という性格を強くもっているという（フローニンゲン31-50, 155-65, 172-7）。また、民俗学者の指摘するところでは、古代ギリシア人は過去の事象に経験的な範をもとめ、それゆえに、早くから歴史に関する関心が強く、ヘロドトス、トゥキュディデースのような歴史家を産んだという。そして、彼らは未来に対する計画性に乏しく、場当たりのであったといわれる（Vernant-Vidal-Naquet 73）。このような傾向はアリストテレスの著作にもうかがわれる特徴であって、彼は未来の事象の不定性のゆえに、それが確実な知識の対象となることを拒否した。そのもっともよく言及され、よく知られている例は建築の例である。アリストテレスによれば、「土台があるから、家がある」ということはできない、土台があっても、家につくられないこ

とはありうるからである。しかし、逆に、「家があるから、あるいは、家があれば、土台はある」ということはできる、土台のない家は考えられないからである。このような関係は家の存在仮定にたつ土台の存在という意味で、「仮定的あるいは条件的必然性」とよばれた。このように彼は未来に対する不信感を抱き、未来事象の不定性のゆえに未来に対して留保的な態度をとった。そこで、彼はすでに出現した事象を出発点とし、それをもたらした過去の事象へと遡行することを基本的な態度とした。このようなギリシア的心性を支配する〈過去指向性〉こそが彼の知識観の根幹であり、それゆえに、すでに発生した事実を導出できる前提をもとめ、それを可能にする根拠による論証の尊重と中項を原因とする原因観にいたったと思われるのである。

それでは、アリストテレス知識論における「事実による論証」の位置づけはどうか。彼はより劣るものとは考えてはいたが、それでも単なる推論ではなく、「論証」なる名称でよんだのである。この点について彼自身はとくに論じてはいないが、『後書』第1巻3章のつぎの主張は参考になろう。彼は論証が根源的な真理から出発する以上循環的ではありえないことを述べたのちに、論証の前提に対する条件「より先」、「よりよく知られた」を「本性上より先」、「本性上よりよく知られた」を意味するものと解したときの論証を「端的な論証」(apodeixis haploē) とよび、「われわれにとってより先」、「われわれにとってよりよく知られた」と解するときの論証を「端的でない」(ouch haploē)「もうひとつの論証」(he hetera apodeixis) とよんでいる (72b32-33)。現に、事実による論証の前提のひとつは経験的事実の言明であって、まさしく彼の言う「われわれにとってより先で、よりよく知られた」ものなのであり、したがって、それは「端的でないもうひとつの論証」ということになるだろう。

それでは、実践的な自然学者として評価の高い彼の自然研究における推論方法についてこの論証の見地から考察してみよう。アリストテレスはその自然研究に関する諸著作において、全般的に、〈根拠による論証〉の基本的なパターンにしたがって論述を進めていて、〈事実による論証〉のシェーマにしたがう論述はまずもって見うけられないと言ってよい。以下で、自然学の各領域、

『天体論』、『動物部分論』および後世ガリレオもとりあげることになる「浮体論」の箇所を検討することにした。

彼は『天体論』第2巻9章において、天体が音響を發し、しかもその音は共鳴して階調があると主張するピュタゴラス派の意見を論駁して、そのような事実はないと言う。ピュタゴラス派は、地上の物体はさして大きくはなく、速く運動するのでもないのに、音を發するのだから、莫大な大きさと速さをもつ天体は莫大な音を發するはずで、それがわれわれに聞こえないのは、われわれが生まれ落ちてこのかたその音のうちに生活してそれに馴れているからだ、と主張している。アリストテレスの反論は、巨大な音響は石やもっとも強固な物体さえ破壊する。それゆえ、天体の莫大な音響は雷鳴よりもはるかに大きいだけでなく、その音の働く暴力も莫大であるはずなのに、われわれはその音を聞かないばかりでなく、強力な打撃を受けてもいないから、天体が音響を發しているという事実はない、というものである。

まず、論証風に単純化したピュタゴラス派の立場は以下のようなものである。「天体は大きく、速い速度で運動する。大きく速い速度で運動する物体は大音響を發する。ゆえに、天体は大音響を發する。ところが、音響に馴れているものは音響を聞かない。われわれは天体の大音響に馴れている。ゆえに、われわれは天体の音響を聞かない」。

一方、アリストテレスの論旨はこうである。「天体は大きく、速い速度で運動する。大きく速い速度で運動する物体は大音響を發する。ゆえに、天体は大音響を發する。ところが、大音響は強力な打撃をわれわれにあたえる。われわれは強力な打撃をあてられていない。したがって、天体は大音響を發していない。音響を發しないものをわれわれは聞くことはない。それゆえ、われわれは天体の音響を聞かない」。この推論は「天体が大音響を發しない」理由の考案を要求する。アリストテレスが『形而上学』第12巻8章においてユードクソス・カリッポスの天体球にくわえてそれぞれの天体の運動と逆方向に運動してその影響を打ち消す「補償球」という提案をしているひとつの理由もこの音響の問題にあるのかも知れない。

つぎに、『動物部分論』から2箇所検討しよう。最初は第3巻4章のはじめ(665^b6 ff)の心臓に関して述べられている部分で、その要旨はつぎのようである。心臓はあらゆる有血動物に見られるが、その理由は以下のとおりである。すべての有血被造物は必然的に血液を有するが、血液は液体であるから、必然的にその容器がなければならない。自然が血管を考案したのはあきらかにこのためである。そして、この血管はひとつの出所をもたなければならないが、それが心臓なのである。このことは、血管が心臓から出ているのであって、それを通りぬけるのではないから、確かである；さらに、心臓は血管と等質である；またその占める位置は支配的な場所で、体の下部よりは上部の、後ろよりは前の、中央の場所にあり、自然は、より重要なものが妨げないかぎり、より敬うべきものにより敬うべき場所をあたえるのである。

ここでの論証方式はつぎのようになる。「有血動物は液体である血液をもつ。液体である血液をもつものは容器としての血管をもつ。ゆえに、有血動物は血管をもつ。血管をもつものはその出所をもつ。血管の出所は心臓である。ゆえに、有血動物は心臓をもつ」補助的に、「心臓は血管がそこから出て、通りぬけていないものである。出るのみで通りぬけないものは出所である。ゆえに、心臓は血管の出所である」さらに、「心臓は体の中央部を占める。体の中央部は敬うべき場所である。ゆえに、心臓は敬うべき場所を占める。敬うべき場所を占めるものは敬うべきものである。ゆえに、心臓は敬うべきものである」血管は心臓から出るのみで帰ってはこないという主張は、経験的事実として述べられているのであろうが、後世血液循環説が唱えられる際、大きな障害となったことは想像に難くない。この引用箇所の前後では発生学的に貴重な事実に言及しているだけにこれはきわめて杜撰な主張と言わざるをえない。

第二の箇所は第3巻6章669^a14-23の部分である。ここでは、肺臓と心臓の関係が論じられている。呼吸器官は肺である。肺は心臓に運動の源泉をもち、大きくてスポンジ状なので、息の流入に広いスペースをあたえる：つまり、肺がふくらむと息は流れこみ、縮まると息はふたたび出てゆく。肺が心臓の脈動のクッションになるというプラトンの『ティマイオス』の理論は誤りである。

心臓のこの鼓動は実際には人間以外には見いだされないが、それは人間が未来の希望と期待を有する唯一の動物だからである。さらに、多くの動物においては心臓は肺からはなれており、その上方に位置しているから、肺は心臓の脈動を吸収するのになんの役にもたたないのである。この論法を子細に分析する必要はないが、心臓の脈動は人間にしか見られないという事実認識と人間だけが未来の希望もつからという理由づけには驚く。これは未来の期待に胸が高鳴るといった発想に由来するものかも知れないが、唐突で、奇妙である。

『動物部分論』の冒頭では理論学と異なり自然学においては「条件的必然性」にもとづく目的論的論証の必要性が論じられている。上の議論でも「血管は血液を保持するためのものである」とか「肺は呼吸するための器官である」といった趣旨の表現にそれがうかがえる。そして、これはアリストテレスの説明論に重要な論点を提供するが、ほかで論じたこともある（大出 条件的必然性）ので、ここでは立ち回らない。

第3の論証例は『天体論』第4巻6章からである。そこではいわゆる「浮体論」が述べられている。物体の形は絶対的に上下に動くことの原因ではなくて、むしろ、落下速度の大小の原因であることが主張され、その原因がなんであるか見ることは困難ではないと言われている。問題の所在は、鉄板や鉛板は水の上に浮くのに、より小さく軽いものでも、たとえば、円いか長いかすると沈むのはなぜか、というものである。アリストテレスは連続的なもの（おそらく水や空気）のうちには分割が容易なものとそうでないものがあり、さらに、物体にもよく分割するものとそうでないものがある。空気は水よりも分割されるのに容易で、小さいものの方が大きなものより分割しやすい。これらの要因が突き返したり落としたりする原因であると彼は論ずる。平板なものが停止するのは、広い面をつつむから、（それに接する空気や水が）分散しにくく、平板でないものが沈むのは、少しの面しかつつまず、分割しやすいからである。空気においてもおなじような現象がおこるのは、空気が水よりも分割されやすいからである。さらに、重さのあるものは下に沈む一種の力をもっているし、連続的なもの（面）も分散しないある種の力をもっているから、この両者の比

を考えないと、沈むか浮くかがわからない。重さの力がまされば、沈下の速度が速まり、逆であれば浮きあがることになる。

この説明においても、きわめてあいまいな事実の描写にたつて、原因の解明が試みられ、その事実にあわせて原因と前提の選択が行なわれているために、全体の論旨が場当たりの印象をあたえる。この浮体論については、ガリレイの所論と比較してその特徴をあきらかにする予定であるので、詳しく論ずることは控える。ここに例示した論証がいずれもより確実で、本性上よりよく知られ、より先なる前提から出発しているとはとても考えられないが、前提の恣意性と不確実性はともかく、形式的には論証（あるいは単なる推論）の形式を少なくとも背後には意識していることは感得しうらと思う。また、それにくわえて、彼が「事実による論証」に似た推論方式によって、未知の事象を予言し、それを経験的に確かめる意図や可能性に言及している箇所は皆無にひとしいことも私を驚かせる。他人の理論を論駁するのにも、事実を判定をゆだねるという態度はうかがえず、つねに断定的である点も特徴的と言ってよいであろう。ここに彼の知識論の重要な特質と重大な欠陥が潜んでいたと言わざるをえない。

最後に、上の論点との関連で彼の言う「弁証的推論」と「仮定的推論」および「公理」と「定義」について簡単に考察しておこう。『後書』第1巻2章(72^a7-25)においてアリストテレスはこう述べている。「第一の前提から出発するとは固有の原理 (*archē oikeia*) から出発することである；なぜなら、私の言う原理と第一の前提とはおなじことだからである。そして、論証の原理とは無中項の前提であって、無中項とはそれより先の他の前提の存在しないことである。前提は言明の [肯定・否定] どちらか一方の部分で、弁証的 (*dialektikē*) 前提はどちらの部分もひとしなみに措定された前提であるが、論証的 (*apodeiktikē*) 前提は真であるとしてはっきりとその一方が措定された前提である。言明は矛盾の [肯定・否定] 両方の部分である。矛盾はそれ自体からしてその中間の存在しない対立である。矛盾のうちのなにかをなにかについて主張する部分は肯定であり、なにかをなにかに反して主張する部分は否定である。私は推論上の無中項の原理が証明されもしないし、なにかを学ぶのに

必要とされることもないとき、それを定立 (thesis) とよぶが、なにかを学ぶのに必要とされるときには公理 (axiōma) とよぶ；というのは、なにかそのようなものは存在するし、とりわけそのようなものについてはその名称でよぶのがわれわれの慣例であるからである。なにかが存在するとか存在しないとか私が言うときのように、定立のうちで言明の [肯定・否定] いずれかの部分を措定するものは仮設 (hypothesis) であり、そうでないものは定義 (horismos) である。なぜなら、定義は定立である：算術家は単位は量的に分割不可能であることを措定するからである；だが、それは仮設ではない；単位がなんであるかは単位が存在するということとおなじではないからである」

さらに、10章においては「証明可能であるのに証明せずに受容しているものを、その当の人がもしも学習者にもそう思われるとして受容するのであったならば、前提としておいている (hypothēmi) のであって、それは端的にいう仮設なのではなく、その人にとってのみ仮設なのである。だが、いかなる意見も心中にもたないかそれとも対立する意見を心中にもちながらもおなじことを受容するのであったならば、要請されている (aitēmi) のである。そして、そこに仮設と要請 (aitēma) の差異がある；なぜなら、要請は学習者の意見に対立しているか、あるいは、だれかが論証可能 (apodeikton) であると思いながらも証明せずに用いているものだからである」(76b27-34) この引用から見るかぎりではアリストテレスは「仮設的推論」とは、本来は、「存在する (しない)」という存在に関する仮設にもとづく推論を意味しているが、また、より漠然と「仮設として前提する」という表現を用いることを許容しているように思われる。そして、実際、『トピカ』第1巻18章において類似物 (to homoion) に関する議論を論ずる場合には、「仮設的推論」なる語ははるかに自由に用いられていると言ってよい。類似性の考察は帰納的な推理にも仮設的な推理にも有用であると主張しながら、彼はこう述べている。「類似性の考察は仮設からの推論 (ex hypotheseos syllogismos) にとっても有用であるのは、類似物のひとつがそうであるように、その他のものもそのようであると考えられているからである。それゆえ、それらのあるものを十分議論するのであれば、提示され

ているものについてもそれらについてあるのおなじようであるとあらかじめわれわれはたがいに同意する。そして、それを証明する (deixantes) われわれはいま提示されているものをも仮設から証明したことになるろう：というのは、それらのものがあるのおなじように提示されているものもあるということを仮設としておいて、われわれは論証をなしとげたからである」(108^b13-19)。ここで言われるような「類似物についての事態」を仮設として措定することが論証の条件としての第一の、無中項の、その他の条件をみたすような前提として考えることは困難であろうし、また、上述のような存在に関する「仮設」と見なすことも困難であろう。したがって、この件りでは「論証」なる語もかなり射程をひろくして用いられていると言ってよい。

もっとも、「仮設」なる語をアリストテレスの hypothesis の訳語として使用することにはわたしは若干の躊躇と疑義をおぼえる。というのは、アリストテレスの場合、現代のわれわれが用いている「仮設」あるいは「仮説」の語のように、「仮の」という意味をどれだけ有しているか疑問に思えるからである。彼の言う hypothesis は字義通り「下におく」、それゆえ、「前提としておく」という意味以上に「仮におく」という意味をふくまず、いつでも訂正もしくは否認可能であることを意味してはいないと感じられるのである。すでに引用したプラトンの『国家』篇における用法は「踏み台として、また躍動のための拠り所として」という表現を用いて、暫定的なニュアンスを漂わせてはいるが、それでも否認可能性にまで結びつく用法とは言いがたい。その点からすれば「仮設」よりは、語呂合わせに似ているが「下設」あるいは「下定」の字を用いた方が適當ではないかという印象をもつ。アリストテレスにおいては「仮設的推論」であっても、前提の変更はそれほど強く意識されていたとは思われない。

さらに、アリストテレスの「公理」と「要請」という語もそれほど明確とは言いがたい。それでも、彼は「定立」なる語で知識の獲得に必要とされない基本的な推論上の原理、たとえば、無矛盾律、排中律などを念頭におき、知識の獲得に必要とされる特定領域に関する実質的内容をともなうものを公理とよび、

そのうちでも、各領域にまたがる共通なもの、たとえば、「等しいものから等しいものをとりのぞけば、残りは等しい」といった言明を共通な公理とよんでいることはうかがえる。もっとも、それにつづく箇所では「定立」の語は単なる前提を出ない意味で使用されているように思われるが。さらに、学習者がそれに対する反対意見をもちうるような前提を「要請」と称しているに見えるが、この点に関してはあらためてユークレイデスの『原論』における用法とともに検討することにする。

アリストテレスが論証、とくに根拠による論証においてその前提の確実性にこだわったことが彼の理論における論証の自由な使用を制限し、その知識論を説明論に限定する結果を招いたが、その点では、彼は「弁証的推論」をより重視すべきであったと思う。言明の肯定・否定いずれかに組みしな前提の措定こそ真に「仮定」あるいは「仮設」の名に値する。それに反して、彼の言う「仮設」はその暫定的性格がはるかに希薄であった。おそらく、このような事情も彼が事実による論証のもつ前提の否定可能性を忌避した一因であったのではないかと推測される。そして、これは彼の学説の権威とともに後世に想像をはるかにこえる大きな影響をおよぼしたのである。

Ⅲ 総括的結論

紀元前5世紀終わりから約1世紀のあいだにアテナイにはソクラテス、プラトン、アリストテレスというギリシア思想を代表する思想家が登場して、たんにギリシア思想にとどまらず、以後の世界思想に決定的な影響をおよぼすことになったが、ここでもつばらとりあげた知識論の領域においても彼らの影響は甚大であり、現代にも継続していることは言うまでもない。彼ら以前の思想家と異なり、この3人は個々の知識の習得もさることながら、「知識とはなにか?」という問いかけにおいてまったく異なる相貌を呈し、また、それによって人類の思想史に消しがたい刻印を残した。彼らが共通に抱いていた〈知識〉(epistēmē)のイメージはその不変性・確実性を本質とし、彼らはそれを日常的なはるかに脆弱な知識、彼らの言う「意見」(doxa)から分離してその特

質を明らかにするとともに、その獲得手段を探ることに努めた。その努力が最終的な段階に到達したのはアリストテレスによる推論構造の解明とそれにもとづく〈論証〉概念の成立であったが、しかし、この論証概念はソクラテス・プラトンに由来する確実性指向に影響されて、将来の事態を予見するというよりはすでに発生した事態の説明を目標とする〈根拠による論証〉を重視するものであった。この点にわたしはアリストテレスのプラトン主義へのもっともいちじるしい傾斜を見る。

このような傾向については、アリストテレスに対する各種の思想的影響もさることながら、肉体的労働をもっぱら奴隷階級にゆだねてそれに従事することなかったギリシア知識階級の社会的環境もけっして無縁ではなかったと推察される。ギリシアの技術水準が当時の他の文化圏に比して格段に相違することはなかったと思われるが、とにかく、ギリシアの知識階層はそれに深く関わることはなかった。技術の特質は、なによりも、器具の製造などの創作にあって、説明にはない。それにくわえて、アリストテレスは『自然学』第2巻1章において、変化の原理をそれ自体のうちにもつものを自然とし、それ自ら以外にもつものを技術によって存在するものとして、両者をはっきりと区別し、分離している。そして、技術の軽視は当然観察用具の改善にはつながらない。このような視点にたてば、自然現象解明に技術を活用するといった発想は生まれにくいと思われる。ともかく、技術を自ら行使せず、経験との接触はもっぱら観察にたよっていたギリシア知識階層の潜在的意識がその知識論を説明重視の方向にむかわせたであろうと論ずることはかならずしも牽強附会ではないであろう。

人類はアリストテレスによる論証概念の提示によってはじめて知識は一定の論理構造をもち、また、それによってこそ〈真の知識〉とよびうることを学んだ。これはまさしく画期的な出来事であり、以後人類全体がその決定的な影響下におかれることになるが、その知識概念の基本的特徴がどこにあるかを論ずるのが本論文の意図であった。そして、この〈論証〉概念を、その歴史的意義の重要性を考慮して、わたしは〈正統的知識観〉とよぶことにした。つぎの論文で論ずるように、ヘレニズム期以降、真の知識あるいは学問はこの論証概念

にのっとして構成されるべく努力されてきたし、それに適合しない知識は多くの場合非正統的な知識として蔑視され、しばしば社会的に排除されたのである。しかし、ギリシア以前の知識がそうであったように、人類はけっしてこのような正統的な知識の獲得のみを目指したのではなかった。正統的知識観の基本的な説明論的性格を打破するあたらしい知識観の形成には非正統的な知識への欲求が不可避な要因として働いた経緯を考究するのが今後の論攷の主題である。

註

- (1) 以下プラトンとアリストテレスの引用は主として岩波版の全集を参照したが、かなり変更した部分がある。参考にした英訳や原典については参考文献に掲載した。

参考文献

Aristotelis opera.

Analytica priora et posteriora. Ed. by W. D. Ross and L. Minio-Paluello. 1964. Rev. ed. Oxford: Clarendon Press, 1986.

De caelo. With an English Translation by W. K. C. Guthrie. Loeb Classical Library. Aristotle VI. 1939. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1986.

De partibus animalium. With an English Translation by A. L. Peck. Loeb Classical Library. Aristotle XII. 1937. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1993.

Metaphysica. Ed. by W. Jaeger. 1957. Oxford: Clarendon Press, 1985.

Physica. Ed. by W. D. Ross. 1950. Rev. ed. Oxford: Clarendon Press, 1985.

Topica et sophisticorum elenchi. Ed. by W. D. Ross. 1958. Rev. ed. Oxford: Clarendon Press, 1979.

The Complete Works of Aristotle. The Revised Oxford Translation. Ed. by Jonathan Barnes. 2 Vols. Princeton: Princeton UP, 1984.

ヘンペル, カール G. 『自然科学の哲学』 黒崎 宏訳 培風館 1967.

Histoire de la science. Encyclopédie de la pléiade 5. Dirigée par Maurice Daumas. Paris: Gallimard, 1957.

Lloyd, Geoffrey Ernest Richard. *Aristotelian Explorations*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.

大出 晃 「アリストテレスにおける条件づき必然性」 創価大学人文論集 6 (63-86)

Platonis opera. Ed. by John Burnet. 1899. Rev. ed. Oxford: Clarendon Press, 1905.

Tomus I Phaedo

Tomus II Phaedrus, Theaetetus

Tomus III Meno

Tomus IV Respublica

ヴァン・フローニンゲン, B. A. 『過去からの発想：ギリシア思想の一つの相についてのエッセー』 野口・左中・矢内訳 未来社 1988

Vernant, Jean Pierre. Aspects mythiques de la mémoire. *Mythe & pensée chez les Grecs: Études de psychologie historique*. 1965 (F. Maspero). Nouvelle édition et revue et augmentée. Paris: Éditions La Découverte, 1988.

Vernant, Jean Pierre. De la volonté dans la tragédie grecque. *Mythe et tragédie en Grèce ancienne*. Ed. par J. P. Vernant et Pierre Vidal-Naquet. Paris: F. Maspero, 1973.